日本語教育と日本語の歴史

多和田眞一郎

日本語に限らず、言語教育なるものは、現代語だけを対象にすることが自明の理であるかのように進行する。その言語を習得し、自在に運用できるようにすることを目的とするのであれば、当然過ぎる帰結ではある。しかし、現代語の習得・運用が目的であったとしても（ここでは「日本語」に限定して考えるが)、現代語しか見ないのは視野が狭過ぎるし、豊かさに欠けることとなる。所謂「日本語教育・教授」の立場に立った場合、(教授者の）日本語の歴史に関する知識の有無によって教育・教授効果に少なからぬ影響が出ることが予想される。学習意欲の多寡に連動すると考えられる、教授者に対する（学習者の）信頼・尊敬の大きな要因の一つにはなろう。それより何より、基本的なことを言えば、絶えず変化している言語の「流れ」の結果としての「現代語」なのであり、独立してそれだけで存在しているものではない。「なぜそうなのか」を考えるには、以前はどうだったかについて問う、つまり過去に遡るしかないのである。その最たる例が「かなづかい」の問題である。これを手初めとして、いくつかの例を上げながら、「日本語教育」と「日本語の変化・歴史」について考えてみたい。

１、ハ行転呼音

「シクラメンのかほり」という歌がある。「懐メロ」の定番のようになっていて（特にその花の季節には)、外国人にも人気のある歌の一つになっているようであるが、それ故に言語教育上厄介な代物である。「正書法」を無視した「かなづかい」だからである。「語頭以外のハ行音はワ行音になった」等という認識があり，それをもとに奇を衒った表記にしたかったのだろうか。「かお（顔）←かほ」「おおい（多）←おほし」等からの類推であろうか。

「かなづかい」の規則に従えば「－かをり」にしなければいけない。音変化の結果「お・ほ・を」が「お」に集約された、あるいは収束した。それを元に戻そうとした時に三本ある道のうちのどれを取ればよいか。日本語の変化（歴史）に関する知識が要求されることになる。

「ハ行転呼音」は、長音表記、特に「－う」と「－お」との違いにも関係する。例を示そう。

こうい（行為）：こおり（氷)、とういい（等位）：とおい（遠い)、
ほうほう（方法）：ほお（頬）

これらをもとにした限りでは、「ーう」は漢語、「ーお」は和語であることがわかる。そして、「ーお」は（「こほー」「とほー」「ほほ」のように）「ハ行転呼音」である。このことがわからないと、「そのとうり（通）」「とうい（遠）」等と書いてしまうことになる。

なお、厳密に言えば、「ーう」にまとめた「漢語」も元を辿れば一様ではない。例えば、「方」は「はう」であるし、「法」は「ほふ」である。これらの知識は次の段階のそれとして要求されることになろう。

ところで、「ハ行転呼音」の結果、現代語では「ハ行の動詞」は存在しないことになった。「あふ（合）、いふ（言）、おもふ（思）、かふ（買）、はふ（這）、まふ（舞）、わらふ（笑）」などはそれぞれ「あう、いう、おもう、かう、はう、まう、わらう」等となった。これに関しては、「五十音図」のところで改めて述べる。

2、「五十音図」

文字と発音の導入に「五十音図」を使うのは、有効で、有用であると考える。その延長で動詞の変化（活用）の説明に使うのも方便としてあってよいと考える。ただし、「五十音図」をそのまま使うのは能がない。

次のような工夫が望まれるのである。

わ	ら	ま	ば	な	た	さ	が	か
い	り	み	び	に	ち	し	ぎ	き
う	る	む	ぶ	ぬ	つ	す	ぐ	く
え	れ	め	べ	ね	て	せ	げ	け
お	ろ	も	ぼ	の	と	そ	ご	こ

動詞の変化（活用）の説明のために「五十音図」を使うとした場合、必要なのは、右の表に示したものだけである。つまり、現代日本語においては「ア行、ザ行、ダ行、ハ行、ヤ行」の動詞は存在しない。また、「ワ行」は「わ、い、う、え、お」とすべきであることにも注意する必要がある。例えば、「洗おう」「買おう」等であって、「洗をう」「買をう」等ではないことを示す。

このような表にしてしまうと、それぞれの「行」に属する動詞がそれぞれに多数あるような印象を与えるかもしれないので、そうではないことも説明しておく必要があろう。それには、「ナ行」の動詞は「死ぬ」一語だけであることを示せば十分であろう。

3、「じ・ぢ」と「ず・づ」

「五十音図」は、「同じ行は同じ子音」で統一されているはずのものであったが、発音の変化の結果不統一を生じてしまった。それが「し・ち」「す・つ」と「じ・ぢ」「ず・づ」

に象徴的に現れることとなった。「た・て・と」と「ち」及び「つ」との違い、そして、「し」と「さ・す・せ・そ」との違いは、今措くとして、「し」と「ち」との発音は違うのに「じ」と「ぢ」の発音は同じであり、「す」と「つ」との発音は違うのに「ず」と「づ」とは同じであるという（現代語の）現実にどう対応するか。（これは、後述の、日本語のローマ字表記とも関係が出てくる。）

音声学的な説明もある程度要請されることになろう。特に成人学習者、それも所謂「インテリ」の場合はなおさらである。ここでは、ローマ字表記を持ち出さないことが賢明である。ローマ字表記（あるいは、アルファベット表記）で説明しようとすると混乱を増幅させるだけである。（音声だけで納得が得られないのであれば、音声記号の使用も必要となる場合があろう。）

「ち」の音声は［tʃi］で、それに対応する「ぢ」の音声が［dʒi］であって統一が取れているのに対して「し」と「じ」とは、そうはいかない。「し」の音声が［ʃi］であるのに「じ」の音声は［ʒi］ではなく、［dʒi］であるのが普通である（厳密に言えば、語頭か、語中か等で違いが出てくるが）。同様に、「つ」の音声が［tsɯ］、「づ」の音声が［dzɯ］で足並みがそろっているのに、「す」と「ず」は違う。「す」の音声は［sɯ］、「ず」の音声は［dzɯ］で対応がずれてしまう。つまり、文字と発音（音声）の対応から言えば、「し」：「ぢ」、「ち」：「ぢ」、「す」：「づ」、「つ」：「づ」というようになってしまう。日本語の（音声の）変化の結果このようになったということを知っているか知らないかで学習意欲・結果に微妙な影響があるように見受けられる。

日本語のローマ字表記とも絡めてこの問題をもう少し詳しく考えてみたい。

4、日本語のローマ字表記

外国人が日本語を習得する際に、特にアルファベットを使用している言語を背景に持っている場合、ローマ字（アルファベット）を使うとよいという考え方が根強く残っているようである。もっともなところもあるが、あくまでも補助的な手段として一時的・便宜的に使うのがよいと考える。導入をスムースに進めるために使ったはずの薬が毒薬に変化してしまう恐れがあるからである。日本人が他の言語を習う時に、平仮名なり片仮名なりで押し通したらどうなるかを考えてみれば、答は自ら出てくるはずである。それに、同じ文字を使っていると言っても、言語によってその発音が違うのが普通である。例えば、スペイン語の‘genio’と英語の‘genius’の‘ge’は「同じ発音」ではないし、ドイツ語の‘Zeta’の‘z’と英語の‘zeta’の‘z’とスペイン語の‘zeta’の‘z’は、それぞれ別の音を表している。日本語をローマ字で書いたものがどのように発音されしまうか、想像に難くないであろう（これについては、あとで少し述べる）。

以上のことを踏まえた上で、方便として（あるいは、必要悪として）、日本語をローマ

字表記にしなければならない場合、「しちすつ」「じぢずづ」をどのように表記したらよいかについて考察する。

日本語の音韻体系など眼中になく（あるいは、知る由もなく）英語のどのような発音に近いかという観点しかないと思われる「し＝shi」・「ち＝chi」・「じ＝ji」は、いま論の外に置く。

表記の統一を考えれば、「さ＝sa、し＝si、す＝su、せ＝se、そ＝so」「た＝ta、ち＝ti、つ＝tu、て＝te、と＝to」「ざ＝za、じ＝zi、ず＝zu、ぜ＝ze、ぞ＝zo」「だ＝da、ぢ＝di、づ＝du、で＝de、ど＝do」のようにしてもよさそうであるが、「じ・ぢ」「ず・づ」の問題があるのであった。それぞれどちらか一方（ziかdiか、zuかduか）にしてもよいのであるが、記号の統一性の上で難点が生じる。「じ・ぢ＝zi」とした場合、「ちti」と「zi」との対応が不自然であり、「じ・ぢ＝di」とした場合、「しsi」と「di」との対応が不具合になる。「ず」「づ」の場合も同様の問題が派生する。そこで、「zi, di」と「zu, du」それぞれをカバーする意味で「dzi」と「dzu」を採用したらどうか。即ち、次のようにする。

じ
ぢ } dzi

ず
づ } dzu

「ti」で「ち」[tʃi] を表わそうとすると文字と発音との間に距離があるので「ci」とし、「tu」で「つ」[tsɯ] を示そうとするのも同様なので「cu」としようという立場がある。基準を、日本語ではなく、別の言語に求めているように見える。別の言語でどのように発音するかではなくて、日本語ではこのように綴り（ローマ字書きし）このように発音するという立場を堅持すればいいのである。如何に工夫しようとも意図したとおりには読んでもらえないのであれば工夫は無駄である。いや、それ以外に綴り方がなく、そのとおりにしか読みようがないと思われるものでも、自分の（言語の）読み方でしか対応してくれないのが普通である。例えば、人名の「加藤」「伊達」をローマ字書きした「KATO」、「DATE」が、英語ではそれぞれ [keitou]、[deit] 等と発音されてしまい、[kato:]、[date] 等とは別物のようになってしまう。相手に合わせようとする努力は徒労に帰する。自身の中に基準を求めるしかないのである。

そもそも英語そのものが「歴史的仮名遣い」に相当する「古い綴字法」で現代語を表記していて不合理この上ないものであるのにも拘らず、人々は、英語の表記法はそういうものだとして受け入れている。たとえ不合理性に気付いたとしても、‘ghoti’をどう発音するかと問い、[fiʃ] という答えを出して揶揄するぐらいである。（ちなみに、‘gh’は‘enough’等の‘gh’、‘o’は‘women’の‘o’、‘ti’は‘station’等の‘ti’なのだそうで

ある。)

日本語のローマ字表記法はこうなのだというしっかりしたものを示せば充分である。アルファベットではカバーできないのを承知の上で考えられたハングルの（アルファベットへの）転写法や中国語のピンイン（拼音）を見よである。ハングルに例を取ってみよう。(尤も、1992年に「ハングルローマ字表記　南北単一案」合意をみながら、それを使用せず「エール方式」なるものを後生大事に守っている人もあるが)「首都」を示す「ソウル」を普通‘seoul’と表記する。[ɔ] に近い音を示すハングル（[o] と対立する）と対応させるために‘－eo－’を当て、‘seo－ul’と分けて欲しかったようであるが、実際は‘se－oul’と分析され、[sewu:l]「セウール」のように発音されてしまうようである。更に厄介なのが次のような例である。「崔　choi」。ハングルをアルファベット（ローマ字）転写したものであると言えるが、このアルファベットからは [tʃoi] ぐらいしか連想できまい。しかし、現代語音は [tʃe:] にかなり近い音となっていて、「che」でもよさそうであるが、そうはしない。(「che」を当てる綴字があるからでもあるが。) アルファベットの後ろにハングルが透けて見えていないと発音できない仕組みになっているのである。日本語のローマ字表記もそのようであっていいと思う。「kyaw」と綴って [tʃo:] と発音させる言語もあるということを付け加えれば、さらに納得がいこう。

ローマ字表記と関連して、「如何に読むか」ということで、「音読み」と「訓読み」について一言しておこう。

音読みはその漢字の（日本語訛）中国語発音、訓読みはその漢字の日本語の意味と発音を示している。例えば、「猫」は、音読みでは「ビョウ」で、訓読みでは「ねこ」であるが、同様の意味において、. 仏語の‘chat’の「音読み」は「シャ」で、「訓読み」は「ねこ」だと言うことができる。どのような外国語であっても（日本語と接触した時点において)「音読み」と「訓読み」が生じることになる。このように考えれば漢字も覚えやすくなるかもしれない。

ビョウ……音読み……シャ
猫　　chat
ねこ　……訓読み……ねこ

なお、「音読み」は片仮名で、「訓読み」は平仮名で書くもののように決めてかかっている向きがあるが、これはあくまでも両者を区別する必要がある場合の方便であることを認識すべきである。逆でもいい訳であり、(わかっていれば) 書き分ける必要はない。

5、母音連続

「ハ行転呼音」のところで少しふれた「母音連続」(二重母音、長母音等) について考察する。

挨拶言葉は、どの言語でも、その由来・成り立ちが少々複雑で、その（言語的）構造の説明は、その言語をある程度習得した後でないと（習得した学習者を対象としないと）受け入れてもらえない可能性が高い。日本語の「おはようございます」「さようなら」等も例外ではない。説明は後に回すとしても、その成り立ちについて教授者が心得ていないと無用の混乱を招く場合もある。

この二つの挨拶言葉も日本語の変化・歴史を説明する時の好例となる。音脱落、二重母音と長母音、正書法等が関係してくる。

「おはようございます」は、「お早くございます」が変化した結果できた形であるが、その変化過程の説明は簡単ではない。以下のようになろうか。

まず、「はやく」が子音脱落（k脱落）を起こして「はやう」となった。[hajakɯ] ⇒ [hajaɯ]。次に、二重母音の長母音化が生じた。[hajaɯ] ⇒ [hajo:]。これを正書法（ここでは「新かなづかい」）によって「はよう」と書くのである。

同様の現象は「ーくございます」全部に及び、「ーく」の前の音が何であるかによって影響を受けることになる。

[ーikɯ] の場合

（例）おおきく（大）[o:kikɯ] ⇒ [o:kiɯ]（おおきう）⇒ [o:kjɯ:]（おおきゅう）
おいしく（美味）[oiʃikɯ] ⇒ [oiʃiɯ]（おいしう）⇒ [oiʃɯ:]（おいしゅう）
すずしく（涼）[sɯzɯʃikɯ] ⇒ [sɯzɯʃiɯ]（すずしう）⇒ [sɯzɯʃɯ:]（すずしゅう）

[ーɯkɯ] の場合

（例）あつく（暑）[atsɯkɯ] ⇒ [atsɯɯ]（あつう）⇒ [atsɯ:]（あつう）
さむく（寒）[samɯkɯ] ⇒ [samɯɯ]（さむう）⇒ [samɯ:]（さむう）
かるく（軽）[karɯkɯ] ⇒ [karɯɯ]（かるう）⇒ [karɯ:]（かるう）

[ーokɯ] の場合

（例）あおく（青）[aokɯ] ⇒ [aoɯ]（あおう）⇒ [ao:]（あおう）
おそく（遅）[osokɯ] ⇒ [osoɯ]（おそう）⇒ [oso:]（おそう）
くろく（黒）[kɯrokɯ] ⇒ [kɯroɯ]（くろう）⇒ [kɯro:]（くろう）

[ーakɯ] の場合の例をつけ加えておこう。

（例）あさく（浅）[asakɯ] ⇒ [asaɯ]（あさう）⇒ [aso:]（あそう）
あまく（甘）[amakɯ] ⇒ [amaɯ]（あまう）⇒ [amo:]（あもう）
たかく（高）[takakɯ] ⇒ [takaɯ]（たかう）⇒ [tako:]（たこう）

「さようなら」の場合は、「さやう→さよう」（[aɯ] → [o:]）の変化だけである。

以上見てきたように（「さう→そう」「きう→きゅう」等に代表されるように）、次の段階として日本古文についての知識が要求されることになる。『日本語教育のための　日本

古文（古典語）入門』が志向されるべきである。

6、撥音

現代日本語の「ん」の音声は、大略［m, n, ŋ , N］の四つであって、次のように、所謂「相補分布」をするのであった。

m／＿m，p，b（例）せんまい（千枚）、しんぱい（心配）、さんばい（三倍）

n／＿n，t，d（例）けんない（県内）、はんたい（反対）、かんだい（寛大）

ŋ／＿（ŋ），k，g（例）さんかい、（三回）、こんげつ（今月）

N／＿その他　（例）せんせい（先生）、れんあい（恋愛）、はっけん（発見）

ところが、最近、そうはいかなくなってきている。上の条件以外での［m］の出現が目につく。確かに以前からそういう現象がなかったわけではない。しかし、それは歌等の特殊な場合に限られていたと見ることができる。強調するためか、あるいは歌唱上の流れのためかによるのであろう。

（例）それが　じmせい（それが人生）　（「川の流れのように」の一節）

あれから　さmねん（あれから三年）　（「喝采」の一節）

それが最近は歌以外でも目につく（耳につく？）ようになった。例を二三上げよう。

TBS系列のテレビ番組に（土曜日夜）「世界・ふしぎ発見！」というのがある。その司会者（もともとアナウンサー。男性）がタイトルを言う時に「ふしぎはっけm」と両唇を完全に閉鎖する。一度や二度の「パロール」的なものではない。「ありません」「ございません」等もそのような傾向にある。[arimasem]［gozaimasem］となる。そこで終了する（言い切りになる）という条件を考慮に入れても看過できない現象である。

もう一つ例をつけ加えておこう。これは時代劇で、若い女性の台詞であるが、[omna]（女）というのがあった。テレビだから唇の様子がよくわかったのである。

この現象が一時的・個別的なものなのかどうかは、俄かには判断できない。「ム音便」等への「先祖返り」でもなかろうが、日本語の「変化」の一部には違いない。

7、促音

日本語から促音が消える、ということにはなるまいが、ひょっとするとと思わせる現象が顕著になっている。変化である。「はちほん（八本）」「はちかい（八回）」「はちパーセント（8パーセント）」等に代表される現象がそうである。それぞれ「はっぽん」「はっかい」「はっパーセント」が「標準」のはずであったから、「日本語教育」の世界ではそのように教育・教授されて来たものと思われる。ここに来て、変更を迫られることになるか。

ところで、音声的条件が同じと考えられる「いち（一）」は「いちー」であったり「いっー」であったりで、変化途上にあるように見受けられる。「一本」は「いっぽん」か

「いちほん」か。「いっぽん」が多く聞かれる印象がある。これに対して「11パーセント」は「じゅういっパーセント」ではなく「じゅういちパーセント」が圧倒的か。

同じ「八」でも条件によって異なるのが現状のようである。「八歳」は「はっさい」か「はちさい」か。まだ前者のような気がするが、いかがであろうか。

そのうち類推によって、音声的条件が同じすべてのケースに波及するであろう。

ちなみに、ワープロは「はちほん」と入力しても「はっぽん」と入力しても「八本」と出る。そのうち「はっぽん」では出なくなるかもしれない。

このような現象が進めば、「ほん」「ぽん」「ぼん」等という「異形態」は消滅することになるか。すでに見たように、「ぽん」は消滅の兆しがある。「ぼん」はどうか。ワープロで試してみた。

「さんぼん（三本)」と言い、「よんほん（四本)」と言うことになっているが、「さんほん」でも「三本」が出る。「よんぼん」では「四本」は出ない。「ーぼん」も消えてしまいそうである。

「ー分」はどうであろうか。「ーぷん」が消えて「ーふん」だけになるか。「なんぷん(何分)」ではなく「なんふん」が多くなったようだし。

何分時間の問題だから、ということにしておこう。

参考文献

多和田眞一郎（1993)『にほんごへの　たびだち』近代文芸社
――――――（1993)『短期集中日本語教育』(私家版)
――――――（1995)『つかえるにほんご』広島大学留学生センター
――――――（1995)『つかえるにほんご　れんしゅう』広島大学留学生センター
――――――（1997)『かんがえるにほんご』広島大学留学生センター
――――――（1997)『かんがえるにほんご　れんしゅう』広島大学留学生センター